

7 8 9 80

90

100

1

2

3

4

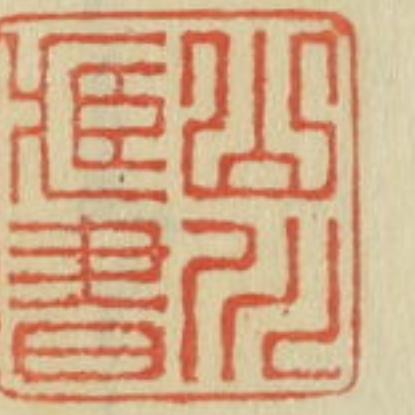
5

6

年隨筆 辛酉上  
二月



信 5  
門號  
560  
卷 1



廣达氏  
藏書記



隨筆一 卷四上

夜もはう。樓多う山木松キ立ま。窓て。乞う。月  
アシマテ。月う一ト。見あわう。友。此四五人。こし。  
アシマテ。山の花。人。よ。行。アシマテ。花。そ。は。う。  
アシマテ。本。山。行。アシマテ。花。ら。も。う。渡。月。橋。の。か  
モ。至。川。の。よ。み。か。う。方。へ。く。風。の。は。し。ひ。あ。  
よ。き。う。と。け。う。れ。る。く。れ。の。山。木。の。流。の。岩。を。み  
ア。テ。オ。ア。ヒ。リ。キ。ヒ。リ。ラ。寺。を。レ。中。野。三。所。レ。い  
ヘ。ふ。人。川。中。の。大。き。ア。キ。う。巖。ア。篤。ノ。篤。ノ。化。う。乞。そ  
え。あ。よ。ハ。ホ。ト。ト。う。水。を。ヨ。レ。ま。う。ひ。て。と。さ。

よ。そぞるあらうつは流ゆ。まやううきこよひとか  
すくらうへと折りとしめかえ。船流ゆう  
くの入たうを。ぶくきくもやううとせとよひと  
アモリ引は。花とさき木あり。  
月は水のはう。まよひと大きち川のひよ  
まよひうきの岸よもあて。おほひとそくま。  
う人の登りきし南の様やうがうれて水々と  
せせか。千里よゆうと詠するわらじ木のく  
きにゆくと。おおひとすばりとす。それ  
まよひつてもとと。とあひのこすはまくとす。それ

も。そぞるはの声す。一けり折残きひまに。三角  
ニツ三。蓬い。う。う。みを。う。  
市の中を何本もやう。本をうね。う。馬の頭と  
そめつて。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。う。  
おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。  
けの木。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。  
おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。  
おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。  
おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。おと。

月のい。まきや。大きす。松の木。う。う。と。お萬  
ちふやう。う。う。と。お萬家。う。れ。ほ。は。す。う。う。

今之<sup>ニ</sup>よ<sup>リ</sup>は<sup>シテ</sup>わも<sup>ハ</sup>は<sup>シ</sup>め<sup>シ</sup>き<sup>ト</sup>。皇國<sup>ニ</sup>某州<sup>リ</sup>ノ<sup>リ</sup>割<sup>ハ</sup>た<sup>シ</sup>キ<sup>本</sup>を<sup>シ</sup>城<sup>州</sup>和<sup>列</sup>を<sup>ア</sup>す<sup>シ</sup>称<sup>シ</sup>う<sup>タ</sup>々<sup>シ</sup>あ<sup>シ</sup>り<sup>ム</sup>か<sup>シ</sup>ら<sup>ム</sup>よ<sup>ハ</sup>と<sup>シ</sup>世<sup>本</sup>、<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>貴<sup>シ</sup>ち<sup>チ</sup>こ<sup>ー</sup>大<sup>同</sup>弘<sup>仁</sup>の<sup>ト</sup>うの<sup>お</sup>ん<sup>人</sup>と<sup>シ</sup>や<sup>い</sup>せ<sup>き</sup>毛<sup>フ</sup>と<sup>シ</sup>よ<sup>シ</sup>じ<sup>ト</sup>、<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>本<sup>キ</sup>と<sup>シ</sup>今<sup>人の</sup>毛<sup>フ</sup>と<sup>シ</sup>ほ<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>へ<sup>ア</sup>も<sup>ア</sup>次<sup>ニ</sup>又<sup>ミ</sup>某<sup>陽</sup>と<sup>リ</sup>よ<sup>ホ</sup>シ<sup>ス</sup>。う<sup>れ</sup>ひ<sup>く</sup>う<sup>れ</sup>い<sup>ハ</sup>そ<sup>う</sup>も<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>二<sup>百</sup>年<sup>け</sup>の<sup>書</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>た<sup>シ</sup>くと<sup>シ</sup>ち<sup>つ</sup>く<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>を<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>。あ<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>す<sup>シ</sup>本<sup>キ</sup>と<sup>シ</sup>、<sup>シ</sup>は<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>す<sup>シ</sup>本<sup>キ</sup>と<sup>シ</sup>。某<sup>陰</sup>と<sup>シ</sup>よ<sup>の</sup>え<sup>う</sup>う<sup>よ</sup>う<sup>ハ</sup>て<sup>の</sup>と<sup>シ</sup>は<sup>な</sup>く<sup>レ</sup>、<sup>シ</sup>れ<sup>。</sup>

陰陽<sup>ニ</sup>南北<sup>の</sup>へ<sup>ア</sup>り<sup>ト</sup>そ<sup>シ</sup>山<sup>水</sup>と<sup>シ</sup>水<sup>と</sup>シ<sup>地</sup>の<sup>。</sup>その山水の南北<sup>と</sup>き<sup>ト</sup>よ<sup>シ</sup>す<sup>マ</sup>と<sup>シ</sup>と<sup>シ</sup>あ<sup>レ</sup>。皇國<sup>の</sup>人<sup>。</sup>伊勢<sup>と</sup>勢<sup>の</sup>勢<sup>。</sup>尾<sup>漫</sup>と<sup>シ</sup>尾<sup>漫</sup>と<sup>シ</sup>尾<sup>漫</sup>。陰陽<sup>華<sup>陽</sup></sup>と<sup>シ</sup>き<sup>ト</sup>き<sup>ト</sup>も<sup>ル</sup>。陰陽<sup>ハ</sup>山水<sup>の</sup>名<sup>と</sup>シ<sup>。</sup>益<sup>州</sup>と<sup>シ</sup>陽<sup>前<sup>州</sup></sup>と<sup>シ</sup>前<sup>陽</sup>と<sup>シ</sup>前<sup>陽</sup>。太<sup>宰</sup>ふ<sup>た</sup>ま<sup>つ</sup>と<sup>シ</sup>一<sup>人</sup>の<sup>者</sup>に<sup>シ</sup>書<sup>く</sup>。日本<sup>信<sup>陽</sup></sup>太<sup>宰</sup>純<sup>と</sup>み<sup>ゆ</sup>と<sup>シ</sup>日本<sup>を</sup>と<sup>シ</sup>い<sup>き</sup>く<sup>と</sup>え<sup>ね</sup>。内<sup>漢</sup>人<sup>唐</sup>人<sup>。</sup>漢<sup>唐</sup>と<sup>シ</sup>じ<sup>く</sup>日本<sup>を</sup>と<sup>シ</sup>い<sup>き</sup>く<sup>と</sup>え<sup>ね</sup>。このは<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>い<sup>ま</sup>く<sup>ま</sup>す<sup>シ</sup>。漢<sup>唐</sup>世<sup>の</sup>く<sup>と</sup>と<sup>シ</sup>國<sup>の</sup>名<sup>と</sup>す<sup>カ</sup>。日本<sup>、</sup>國<sup>の</sup>名<sup>と</sup>せ<sup>の</sup>名<sup>と</sup>す<sup>カ</sup>。お<sup>對</sup>小<sup>鳥</sup>と<sup>シ</sup>い<sup>き</sup>く<sup>と</sup>く<sup>ハ</sup>す<sup>カ</sup>よ<sup>ハ</sup>れ<sup>と</sup>と<sup>シ</sup>わ<sup>り</sup>。

えはよ。とすか。一。次。信陽。と。ふじよ。信。山。の。やう。  
水。の。名。う。ほ。人の。皇國。の。本。場。一。る。悉。い。う。と。す。れ。  
じ。私。と。せ。ぬ。學。の。か。れ。と。り。は。う。方。も。わ。く。と。め。う。故。  
郷。の。て。よ。い。じ。み。も。ア。土。の。地。名。の。陽。の。家。の。義。を。ふ  
え。ー。う。あ。き。い。ど。る。こ。も。ま。す。れ。と。

鳴。弦。と。す。つ。か。と。す。て。怨。氣。と。は。ま。事。と。ぐ。れ。され  
神。社。礼。家。と。あ。と。や。よ。う。う。く。か。た。あ。く。け。く。う。れ。し  
テ。上。代。下。代。う。あ。と。と。あ。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
夙。や。わ。い。し。て。ま。祭。る。一。の。卷。よ。ハ。陽。知。之。戎。大。王。乃。  
朝。庭。取。撫。賜。夕。庭。伊。縁。立。之。御。執。之。梓。ら。之。奈。加。耳。乃。音

馬。奈。利。也。わ。く。を。奈。ふ。珥。ハ。キ。れ。珥。の。済。り。と。珥。よ。路。を  
走。つ。も。て。か。と。に。き。わ。く。て。よ。役。す。る。そ。や。り。ア。役。わ。れ。  
玲。ほ。も。と。し。じ。う。る。ホ。モ。リ。珥。と。さ。い。て。う。い。し。今。接。す。  
珥。ハ。弦。の。際。奈。利。弦。と。や。け。や。う。よ。う。法。す。キ。ア。序。本。流。  
皆。軍。下。陣。ホ。モ。の。ね。き。ア。ト。シ。ん。う。し。同。卷。ホ。大。丈。之。轄。乃。  
音。馬。奈。利。物。部。大。昌。植。良。之。母。と。わ。も。け。も。う。の。ホ  
立。れ。り。不。ト。や。ト。や。本。と。お。く。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
ち。絆。を。原。た。と。も。わ。う。を。聲。唇。の。く。も。と。う。だ。妙。の。穴  
か。ト。源。を。ト。ト。

辛酉。う。革。命。と。い。う。か。と。か。う。年。を。何。よ。ハ

わじとすじゆとまきとそんも運びてあく  
ねどりありとも諸との勘定とあらうるまく  
あらゆるやうすやきよ。奇くともほまち  
まくはりもあらへさくさう。まくす  
はの名金門鳥紋。ダントリントシヒ  
ムタリヒトマトモアレ。ダントリントシヒ  
直はのちりりてこくへき。おもねう代次例示  
も政元も下。寛改いより年号。政の字行せ  
用られつふよ十三年までつきて。造内裏以下。よきよの  
うきよをりふも。そとまき例示をすへか。

辛酉の改元を延長の度をけめと。信行の宰相の勘奏  
ホドモトマトモハ易緯ト辛酉爲革命。甲子鳥革  
令。とありて。鄭玄院よ。天道不遠。三五而寔。六甲爲一  
元。四六二六爻相乘。七爻有三寔。三七相乘。廿一元爲一蔀。  
令千三百廿年。とあるホドモトモ。神武天皇元年を一蔀  
の首と。て。承明天皇六年庚申。と。千三百廿年。天智  
天皇即位の年。承明天皇の辛酉を第二の蔀首と。て。昌恭三年  
まで二百三十年。に。相乘の数から。延長元年を。大寔。  
革命の運。すり。そり。北説。よ。今。年を第一に  
以て六十九年。六十年。六十一年。第二の蔀を。すり。百八十

年ひきへて大變の運うへぬやう。諸  
され勘合へいくわんりうきことよりはしの  
善家の革命勘丈よ。明年辛酉當帝玉革命之期。君  
臣制賊之運。えくえ小洋の右大臣としており。其書  
してまつりて。明年辛酉運當慶車。二月建祝。勅千  
戈。遣凶衛禍難不知誰是。引斧射市當中薄命云。伏  
冀知其止足。察其榮辱。擅風情於烟霞。戲山智於丘壑。  
後世仰視不亦可乎。努力勿忽鄙言とあら。やう  
てその辛酉の四月よ。御の内事とやうにもよせ  
りのわざで。さと近ト。さとアラシ。あまくよ。華とけとう

かくわはす。おきてをひ。神武天皇元年を辛酉と  
はす。もとからさとふくよ。鄭註をくもす。かの  
アモ。何のく。と。わ。じ。や。い。も。よ。つ。ら。く。ま。な  
ふ。ホ。う。う。ナ。ト。ト。い。い。あ。そ。ま。と。ま。と。ホ。う。一。キ  
博古をうりうり。

古學といふ。のまく。人く。某度某度。やく。  
名を。わ。く。と。く。も。た。子。細。も。本。氣。中。う。う。う。  
童名。う。う。き。こ。れ。成。人の。う。と。実。名。よ。つ。し。事。今  
よ。ひ。そ。と。い。う。す。う。度。へ。い。よ。あ。う。う。度。と。始。く。  
お對。い。う。洞。と。貴。人。の。う。の。称。す。う。本。代。い。の。姓。よ

そく朝の本より文治の珍美登義彦と日本紀  
を本記のへしてをばりもどるをよえ出でてかやりいあ  
やすらすうり。あれ書ともハ天皇のむく人をにせる。ち  
らすま彼人カタヒトもみよるか。天皇のむく人カタヒトを歎  
てみう故。ちんともすきうてくすれ。主一國を領す  
うのと。小こと是す。今の大名は領す。凡人  
もうち處我しすめりり。とも。將君カミノクニにはらんは  
とくと。妻カミとりあ名はきてよもや。

いホーの人を。某慶カミヨシとふ名矣。自称してまうとふ  
も。もうへりとくら自稱すうよつきて。人の名ともやく

つくう人の名よ多うる。自称すとからう。かくすゑ  
かね。ひく根カネの間カナよあく。近カタよも  
そ。天子の自称のすよくえとくほを。要向カタヒトのきあき  
らすすりて。今ハカミハもあね。牛ウシ。なくもて  
丸カクよ。名はく。よ。天平勝宝の東大寺の奴スルガと  
某也カミイハと名えり。

宇治拾遺物語ウジシテイモノゴトキと云まうとひ。狹後物語カヒモノゴトキとい  
ふ。まわらへ。宋。花多カツダよ。犬カミよ。翁カミよ。馬カミよ。駿牛繪スジウエ。何物カモコトす。某を  
りふ名カミよ。つくるめ。今ハカミハ本カミとほく。きこ

えす。とく舟のよまやうがあつてあり。

或人の考は、自のうへをまわせり。毫無も人とうべ  
あうといふ事も、うふと不肖ともしむれす。ま  
まかづりて、みされば、お對ひきことのう御奉  
られす。勿もまうき説のすあれは、すよにほくく自  
藻オト。すゆふまうき説のすあれは、すよにほくく自  
かのくち。従まつて、従く。従く。従く。従く。  
うし。翁丸と應く。いふと、りふやわら麻。あわら  
ま。柏子。じつとあらたまのと、うき名まわらまや。  
すて言説の本義が、すま本とあらまく。さう

オトとまうハ自称をとすよ。苟用をとすよ。何のよ  
うか。キル。と。おふと。あからよ解じよすれ。うすく  
模はまた。せんぬく。く。う。お。お。お。お。お。お。  
うし。せんぬく。う。う。う。う。う。う。う。う。う。  
冬うと。まく。う。う。まく。う。う。う。う。う。う。  
の要者。だ。

今とて、船をとくも、あらかん。せ、川の、店居ヤトウ。と  
あらかん。長月とすよ。と。と。と。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。  
と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。と。

アラヤセアキの便りをえりや。アラヤセキ葉よ  
アリレヒはアキ家アリウモトヨリアの痕  
歟アリ。侍もせん人モアリ。アリス。神サミ  
アリ。アリ。風いアリ吹わるよ。アリ火アリ。アリ  
キの火とアリ。アリ。何の火や。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。  
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。  
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。  
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。  
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。  
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。  
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。  
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。  
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。  
アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。アリ。

おひごいそよ漆やうもとす。今の筆をりむち  
いあ名をめうどめうをまくす。筆いとそーし。  
施はれてこられ。筆のじまうがうで。ちうじくは。  
ゆうてふくづくよ。柿の葉の。あらはまちり  
残る。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
二窓くらう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
上せきを仰ぐ。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
木よ立。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
手の池の。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。

いと涼しうて。あく匂いと。うう。うう。  
又うしがたし。  
タマ床おり。うう。ねる。うう。うう。うう。  
うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。  
うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。

さよびひふまかの方といへるのあをもあくでひせ  
心すじしきふ。冬とこまむる風のいそ寒さ不ほ大う  
おがほ。遠山ちの邊のき。うきりとよまなだら  
いは世遠きらむとす。まへ小面そほくとす。  
えくす玉水のうへれ枯葉ようふをす。甚ハ故  
てはくはなれとまきの枝戸もほて並くふせらる  
の月。窓あくは入る。床へりうねきりくす。良  
と。あもよよなよ。あうはんす。  
忌服イヒ。け様ケヨウ。列車ケル。すと。世セ。後中シタ。火のタノレ  
くるやうりふ人も多くる。これどんの人の多くある。

書ふとそ物のまぢかの人も。すふ筆とひあり。  
たまし。うれとまきすくら。今いそりすく。いそりふ各  
てかづく。うれとまきすくら。本くいすく。いそり假カタ。奉  
公せぬ日教カタ。親戚の巻カタ。もしてうそカタ。いそとふまよ官  
と活カタ。もはり。うそカタ。そ。それなきのほし。やと。  
えつへれい。ぬり。うそカタ。假寧カタ。金。允職事官。遺父母  
卷カタ。益解官。自餘皆給假。丈及祖父母。養父母。外祖父母。卅日。  
三月服十日。七日服三日。とある。日教をいそりまづく。ハ  
代ヨの制度の沿革カタ。と。越意カタ。いまのまよ。あとう。やく  
と。假カタ。えつへり。よはき。うそカタ。と。んの人カタ。を用のあく。

りもうち様よりうらやまわる。

服ふ事ふ服・此と云ふ者布の衣すり・親戚のゆりいふを  
日教のゆきり・世衣ともかるよ皮衣としもんち・鈍色  
ハ・今風をいふことをして、人の親さうときかへどりて、  
まことのまことすきをやしわらやう・親戚のみも  
ひそて、更役するうもすき人情とねはれ、定くお勤  
めり・世服とまことせんむだうす・じゆういきうちめす・服  
の日教・ふくても、服者とくふと本よもぐらして、索服か  
う内裏へと賣可庭へと参入とくよもう・中丁うとうへ、  
父母卷とも除服とゆくうくもとからし・今よもじて、

公家ふまとととと・服をまつまわらく奉へ奉・服  
て下ふまととと・服をまつまわらく奉へ奉・名の義をとら  
はめり・結句ハ火の纖る・日限とひうるもいてまつり、  
こゑくらう・様よりうらやま・とくに國をへて、親の卷よ  
あふげも・服ふ事ふ・此と云ふ者、親の卷よ  
といじくちの長威・情のうつ・人本とゆくう・神幸・  
志を移・よせじし・様よりう・佛像・法事とといじし  
し趣意より・きとなき故よそあ・可・経服とて、神事・  
へふ例えず・あらざる。

神幸と云ふ事わら・沂年月次神今食新菴をとる

諸祭。之手の神事の時。いはく。し本。一本丈を神祇  
令よ。凡敵齊之内。諸司用事如舊。不得吊喪。向病食  
完。亦不判刑致。不決罰罪人。不作音樂。不預穢惡之  
事。致齋唯祭祀事得行。自餘悉斷。くらえども。ある大  
事のまゝ次。諸社祭の上で。ト。又ハ。某幣の使よ。り。も  
くか人。社の私宣祝。も。定。す。て。す。て  
公私の奉よ。つまて。神のおまへ。頭は。いつまわる。人。  
も。神も。ども。奉たれ。今世上の人。のうへ。と。嚴密。  
やも。存。そ。く。こ。う。そ。ほ。く。へ。う。い。て。神ね。は。す。人。  
そ。く。く。の。神。の。ま。い。志。と。神奉よ。精。よ。も。じ。と。の。も。

を。う。き。奉。よ。と。う。そ。く。き。奉。よ。と。何。す  
よ。と。ふ。う。う。て。そ。ら。と。う。ね。を。燒。ふ。本。佛像經卷僧  
尼を。そ。じ。と。も。と。ね。も。と。よ。ま。の。う。つ。じ。と。そ。れ。も。  
重綻服の人。と。い。吊喪同病。と。い。不判刑致。不。審罰  
罪人。す。も。も。う。も。う。そ。く。く。く。く。き。よ。む。う。き  
て。神奉。め。う。も。や。そ。ん。と。不。食。完。不。作。音樂。そ  
み。が。も。ハ。だ。り。は。よ。義。ま。ん。と。そ。う。そ。う。神。よ。の  
財。も。う。い。そ。常。ハ。様。ら。す。も。う。様。よ。つ。ま。る。幸。も  
あ。次。

洋様。く。う。そ。ま。う。手。ま。り。の。よ。宿。て。そ。の。様。家。と。く。

うどふ死様產様立體不具様傷胎様到山作所穢  
改葬様血氣様炎様六畜死様產様燒三様々々々  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
永正起よもよせり様氣ハ神本よもよせり  
といひみきらひよもよも死様死様よめりも地人とも  
三十日三十日とも様行様行ハ人人と將将ふ事事すれど様者様者ハ大大く世  
のの様様らひもせてじじすすうききりりううりり本本の上上件  
の四條公家公家はは今今もその宅宅不不れれいいトトううり  
りりててままいいををううききとと上上ううととばばくくううななややりりるるままえ  
多多既既てて死様死様の様様りりふふをを延喜式延喜式よよ甲甲處處有有穢穢じじ入入其其

處處謂謂着着し及同處人人皆皆為為穢穢丙丙入入し處處只只丙丙一身身為為  
穢穢同處人人不不為為穢穢じじ入入丙丙處處同處人人皆皆為為穢穢丁丁入入丙丙  
處處不不為為穢穢也也ぶ本文本文してしてゆゆうう事事不不トト簡略簡略はは  
ききくくむむ難難くくままききくく不不ももりりトト宇宇槐槐雜雜抄抄仁仁卒卒  
二二年年獨獨様様つつありありててゆゆくくわわりり不不死死人のの後後  
ハハ甲甲也也死死人人取取弃棄し後後入入其其所所之之人人ハハ丁丁也也西西宮宮比比山山  
義義八八年年外外記記日日甲甲人人來來所所ハハ己己也也與與甲甲人人同同時時合合己己也也  
己己去去後後向向其其所所之之人人ハハ丙丙也也丙丙人人來來所所ハハ丁丁也也與與丙丙人人  
同同時時合合人人者者丁丁也也丙丙人人去去後後來來人人者者不及及丁丁穢穢清清

妙說有之もあるべからぬと考へておいた。

此文

父母の喪より遣人を本服一年・後半すにて奉より從へま  
わくはる故官を辟もしくおかれを奉辟といひ。罪を  
くて官を辟り奉りする故公はもともと内侍から  
くる官と辟り奉りする故公はもともと内侍から  
ひあらておらへき際をも官を虚して服の期みられては。  
後はもくらへて又棄情從公といふ割あり。官と  
樞要の官えーく虚くすゝる。人も器量を人づくこ  
や無しき付へお拂へてお仕えきと仰うて奉り  
從ふたり。世制事より便わまと能とも世宗テヨウよりて。服  
祥の除くそむきとて。名教のあつと少く徑善アラカナねずみ奉

もくに併木ももつたれども勞を辭はていくと既に  
假五十日よりはくそむきと棄情從公の期限をもくとめ立  
てきよ。

假般汚穢神事よりは度より物あらずとて不もありは。  
事より際て絶あればほほをよせられずなり。大保  
記承正記より書わる。伊勢の相官のほ様の詔本と記  
りある。本より取り本とし。官よりて法家の勘査と  
せて定ふと教あらり。神官より下され世よりう  
さな御令を准的の例より拠あらり。志ある人を化求  
めてみうり。大明寛政年といひ一也とせ申みされ

亂として常世住やアトトウーモル法の家へとげ  
く一きは士をうつしよも公私よりきて軽も  
財も神祇をよせてもすよれり。伯家ト家の  
代々の記録ともよまぬ言わまことゆめり。假とい  
ふも神事の繁忌よりうけ名也。そのうち  
忌と書きこしハセ。自の法事のことをいふもせ、  
も本のありて。四十九日のおと頃一き人。法事と  
本家よりうりて念佛後泣きさせり。ばとく石。  
れもううううううううううううううううう  
延喜式より處有穢。入其處。謂着座。及同處人皆為穢。定

あり人の延穢を着座とりて穢寺。座よりはれも。卷  
家より入ふとも穢ハキ。家内より入る板敷よりうけり。そ  
穢よりあらう。源氏物語より。本のちよねうつそれく。此  
日のねよ。大歎の公達。まよひよへと頭巾将もしうと。立  
チテシテ。入りてのなすいで。すのうち。ううのよ  
うう。否とはまかし板敷より。今も。家あまと。入る。薦とおて。立ちとま寝とはきて。うう。はてそ  
穢より。次とまく。入門の間も薦とうそ。その上を  
スム。國とみそや。穢すり。又實すり。薦

ウタニモ織テウマアオイ伊勢の初官トモヒタツミヒキナリ也  
そ平戸記仁治三年十月十日順應院スンヨウイニト  
弔トモハシム其後參六條宮御懇欵カニク過活カニク金混  
波穀給カニクる。右着沓遼尾カニクお賛子端カニク於北面妻戸也  
福女房カニク因後カニクモハ礼母尼公又波朱渴カニクアリ  
主カニクアモモサニシ。

月水カニク和名抄カニク俗云佐波利カニクアリ。和泉式部カニク  
引カニク月カニクのほくちりカニクすうとせカニクきカニクトシラウ。はくちりカニク  
あくちりカニクトヘキ様カニクアラシカニクトヤウ。んを本記  
倭速命東征カニクの流カニクアホの不カニク入坐先日所期長夜受比

賣之許カニク於是献大御食之時其羨夜受比賣捧大御  
食盛以獻爾羨夜受比賣其於意須比之禰着月經  
故見其月經御歌曰云々多和夜賀比那遠麻迦年  
登波阿礼波意毋因杼那賀氣勢流意須比能須蘿  
爾都紀多知述祁理羨夜受比賣恭御歌曰云々岐  
義麻知賀多尔和賀氣勢流意須比能須蘿爾都紀  
多々那年余故爾御合而云々トモヒタツ。多キ様カニク人  
内カニク益カニクトヘキナリカニクトモナシカニクトセキ全毛  
角カニクアモキナリカニク月水カニクのわふ常カニク内裡カニク延假  
してけくカニクアモキナリカニク月水カニクのわふ常カニク内裡カニク延假

時或持之不可。迄事也。うち。罕き事人有事。うち。  
も神益の役より。あす。わくとて。まき様。ハ  
わく。ぬよ。と。アス。入延式。元宮女懷姫者。敬神  
之日。前退出。有月事者。祭日之前退下。於宿廬。不  
得上殿。うち。祭日。爲。一。やまと。ハ。宿き様。も。や  
ね。延。うち。もう。ホ。南國社。す。より。ハ。社。宜。祝部。の家。  
け。ても。神塲。の内。と。禁忌。い。ア。嚴。と。タ。ヤ  
ヒ。ソ。ふ。下屋。ゆ。うち。ち。や。と。七日。の忌。七日。火を  
改。て。一日。す。日。ハ。同。火。せ。ね。不。も。あ。り。とき。く。は。六  
半。よ。過。ア。孫。ね。そ。い。う。キ。幸。す。ー。物。ほ。が。

よ。手。す。チ。ア。ル。ハ。ま。り。の。手。や。わ。ん。

食。筋。て。穢。を。り。ア。否。い。ま。ニ。勘定。の。次。穢。と。と。ひ。よ。よ。  
内。セ。言。の。忌。詞。よ。完。謂。菌。と。わ。ふ。と。穢。と。ほ。ト。ト。も。ち。入  
方。儀。式。貞。觀。大。葬。祭。儀。よ。預。卷。產。并。雜。畜。死。產。事。卷。限。卅  
日。食。完。限。月。日本。の。事。と。い。す。三。月。の。中。と。し。も。ア。一。本。限。日。と。あ。リ。  
も。三。日。か。れ。と。さ。ア。レ。ハ。产。并。畜。死。七。日。产。三。日。文。保。記。よ。猪  
皮。食。人。禁。忌。百。日。同。火。人。廿。一。日。又。相。火。七。日。木。參  
太。神。宮。と。え。え。ふ。神。事。ア。ド。リ。こ。り。ふ。大。ナ。れ。と。  
死。產。よ。混。一。差。別。す。同。火。三。祭。し。火。と。四。一。祭。と。き  
え。え。決。樂。と。き。し。作。樂。の。ね。ま。わ。す。オ。又。類。聚。三。代

格より載より承和十一年の格より鴨河之流經二神宮但  
欲清潔之豈敢汚穢而遊獵之徒就屠割事監穢上流直  
觸神社因茲汚穢之祟屢出御ト又云凡鴨御祖社南  
邊者雖在四至之外監僧屠者等不得居住といふ事  
りされど屠者ハ肉と屠うりのう四至之外トテニシハシミ  
トキ穢トモシテノ又皮ノリの尔て今之穢多の類り  
ナリヘム肉と屠ふかもほとけくもひくもと有リシ穢矣  
今もいさりうさきをすまへりのと良人ハ同火をすオホの内  
ヘモハスバヒ又穢よわアレトカシトハ日本紀一月夜見  
尊受勅而降已到于保食神許保食神乃廻首鬱國則自

口出飯又嚮海則鱠廣鱠狹亦自口出又嚮山則毛  
廉毛柔亦自口出夫品物悉倫貯之百机而饗之又  
十一。仁德天皇三十八年秋七月天皇與皇后居高  
臺而避暑每夜自蒐餓野有聞鹿鳴云及月盡以鹿  
鳴不聆爰天皇語皇后曰當此夕而鹿不鳴其何由  
焉明日猪名縣佐伯部献色苴天皇令膳部以問曰  
其色苴何物也對言牡鹿也問之何處鹿也曰蒐餓  
野時天皇以為是色苴者必其鳴鹿也云くと云くも  
天武天皇の口付牛馬の肉とくふくと禁セシモトモ  
然廢絆あきゆきナリ祭奠の脇付ナリのとて歎歎

固の代はより。猪。完鹿。完あり。ほも。雜水鳥を代  
用する事ナリ。代りめことして。ち物と奉り。一牛  
角。祈年祭祝詞。白猪。白鶴。洪の祝詞。毛乃廉  
物。毛乃柔物。ナ。あふも。神饌の料。とき。を。行。穢  
ヨア。ド。リ。ト。ナ。リ。ハ。レ。ミ。ト。シ。延喜式。凡觸穢惡  
事應忌者。人死限卅日。產七日。六畜死五日。產三日。  
其喫完三日。此官尋常忌之。但當祭時。兼同皆忌。也。あふも。穢惡の條  
ヨソウ。コレ。ト。際。因の事。ヨイ。シ。ヌ。ト。ナ。リ。ヘ。ヒ。神事  
ト。穢。ヨ。ト。ナ。リ。ス。其の事と並て。本と闇。ト。上  
と。本。異。ト。穢。ヨ。ア。ニ。シ。ヌ。ト。ナ。リ。下。爰見。ト。の。こ。

く。と。一。爻。を。守。西。宮。山。本。と。よ。石。へ。あ。り。や。本。守。て  
引。孝。ノ。一。守。守。レ。ト。穢。ヨ。シ。コ。ラ。ト。キ。モ。く。そ  
け。し。人。よ。子。細。ホ。ト。シ。イ。ナ。シ。キ。ホ。キ。セ。セ。中。う。タ。何。の  
事。ナ。シ。キ。ト。ハ。ホ。今。レ。田。食。ト。シ。肉。ト。シ。肉。ト。シ。穢。そ。  
モ。ナ。シ。ラ。ト。ホ。ト。シ。カ。ト。ナ。シ。モ。ナ。シ。ト。モ。ト。レ.  
ア。ン。ト。ナ。シ。ア。ム。ナ。リ。ト。並。て。人。ハ。准。レ。ト。ナ。チ。レ。ト。書  
ヨ。シ。ナ。シ。シ。ト。ホ。ト。ナ。シ。マ。サ。モ。學。生。シ。ト。ヨ。多。レ。ト。ナ。レ。ト。書  
俗。ナ。シ。ト。ト。ト。ナ。シ。ト。行。人。ハ。准。レ。ト。ナ。チ。レ。ト。書  
尼。穢。ト。レ。ト。ナ。シ。ナ。ム。ア。ト。ナ。シ。ト。行。人。ハ。准。レ。ト。ナ。チ。レ。ト。書  
五。辛。ト。ナ。シ。ト。ホ。ト。ナ。シ。マ。サ。モ。學。生。シ。ト。ヨ。多。レ。ト。ナ。レ。ト。書

家沒社沒<sup>トモミス</sup>れど、<sup>トモミス</sup>き割<sup>ハサフ</sup>トモミス。日本  
紀十<sup>ヨ</sup>。日本武尊<sup>ヒメノミコト</sup>被<sup>ハシマ</sup>烟凌露<sup>タマニシテ</sup>。巡經<sup>タマニシテ</sup>大山<sup>タカヤマ</sup>既<sup>タマニシテ</sup>遯于<sup>タマニシテ</sup>峯<sup>タマニシテ</sup>而<sup>ハシマ</sup>亂<sup>ハシマ</sup>之<sup>ハシマ</sup>。食於<sup>ハシマ</sup>山中<sup>タマニシテ</sup>。山神令<sup>ハシマ</sup>番王<sup>タマニシテ</sup>以<sup>ハシマ</sup>化<sup>ハシマ</sup>白鹿<sup>タマニシテ</sup>立<sup>ハシマ</sup>於<sup>ハシマ</sup>王前<sup>タマニシテ</sup>。王黑之<sup>ハシマ</sup>以<sup>ハシマ</sup>一箇<sup>ハシマ</sup>蒜<sup>タマニシテ</sup>彈<sup>ハシマ</sup>白鹿<sup>タマニシテ</sup>射<sup>ハシマ</sup>中<sup>タマニシテ</sup>眼<sup>タマニシテ</sup>而<sup>ハシマ</sup>殺<sup>ハシマ</sup>之<sup>ハシマ</sup>。云<sup>ハシマ</sup>く<sup>ト</sup>み  
えて<sup>ハシマ</sup>貴人<sup>タマニシテ</sup>も<sup>ハシマ</sup>さう<sup>ハシマ</sup>あ<sup>ハシマ</sup>さ<sup>ハシマ</sup>。佛道<sup>タマニシテ</sup>は<sup>ハシマ</sup>りて<sup>ハシマ</sup>。猿<sup>タマニシテ</sup>の<sup>ハシマ</sup>も<sup>ハシマ</sup>いわ<sup>ハシマ</sup>す<sup>ハシマ</sup>ん<sup>ハシマ</sup>。は<sup>ハシマ</sup>ても<sup>ハシマ</sup>家の<sup>ハシマ</sup>牛<sup>タマニシテ</sup>も<sup>ハシマ</sup>き<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>。衣服<sup>タマニシテ</sup>も<sup>ハシマ</sup>何<sup>ハシマ</sup>も<sup>ハシマ</sup>香<sup>ハシマ</sup>い<sup>ハシマ</sup>し<sup>ハシマ</sup>か<sup>ハシマ</sup>せ<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>り<sup>ハシマ</sup>。と<sup>ハシマ</sup>も<sup>ハシマ</sup>う<sup>ハシマ</sup>良<sup>ハシマ</sup>す<sup>ハシマ</sup>。と<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>う<sup>ハシマ</sup>き<sup>ハシマ</sup>ト<sup>ハシマ</sup>。原氏物語<sup>タマニシテ</sup>も<sup>ハシマ</sup>え  
る<sup>ハシマ</sup>。蒜<sup>タマニシテ</sup>の<sup>ハシマ</sup>か<sup>ハシマ</sup>い<sup>ハシマ</sup>よ<sup>ハシマ</sup>や<sup>ハシマ</sup>う<sup>ハシマ</sup>き<sup>ハシマ</sup>本<sup>ハシマ</sup>ハ<sup>ハシマ</sup>よ<sup>ハシマ</sup>ら<sup>ハシマ</sup>。一<sup>ハシマ</sup>き  
は<sup>ハシマ</sup>ま<sup>ハシマ</sup>す<sup>ハシマ</sup>。不<sup>ハシマ</sup>ま<sup>ハシマ</sup>ば<sup>ハシマ</sup>ま<sup>ハシマ</sup>。と<sup>ハシマ</sup>そ<sup>ハシマ</sup>ん<sup>ハシマ</sup>河入<sup>ハシマ</sup>立<sup>ハシマ</sup>。と<sup>ハシマ</sup>ひ

て<sup>ハシマ</sup>そ<sup>ハシマ</sup>は<sup>ハシマ</sup>や<sup>ハシマ</sup>す<sup>ハシマ</sup>。と<sup>ハシマ</sup>も<sup>ハシマ</sup>せ<sup>ハシマ</sup>う<sup>ハシマ</sup>。と<sup>ハシマ</sup>じ<sup>ハシマ</sup>く<sup>ハシマ</sup>は<sup>ハシマ</sup>ま<sup>ハシマ</sup>ね<sup>ハシマ</sup>  
と<sup>ハシマ</sup>あ<sup>ハシマ</sup>い<sup>ハシマ</sup>よ<sup>ハシマ</sup>。み<sup>ハシマ</sup>つ<sup>ハシマ</sup>禁<sup>ハシマ</sup>忌<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>よ<sup>ハシマ</sup>お<sup>ハシマ</sup>な<sup>ハシマ</sup>。し  
今<sup>ハシマ</sup>江戸<sup>タマニシテ</sup>下<sup>ハシマ</sup>し<sup>ハシマ</sup>き<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>よ<sup>ハシマ</sup>き<sup>ハシマ</sup>り<sup>ハシマ</sup>。と<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>を<sup>ハシマ</sup>  
あ<sup>ハシマ</sup>そ<sup>ハシマ</sup>そ<sup>ハシマ</sup>下<sup>ハシマ</sup>し<sup>ハシマ</sup>。あ<sup>ハシマ</sup>へ<sup>ハシマ</sup>人<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>は<sup>ハシマ</sup>く  
も<sup>ハシマ</sup>年<sup>ハシマ</sup>十<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>。十<sup>ハシマ</sup>行<sup>ハシマ</sup>。家<sup>ハシマ</sup>何<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>。と<sup>ハシマ</sup>人<sup>ハシマ</sup>か<sup>ハシマ</sup>  
う<sup>ハシマ</sup>て<sup>ハシマ</sup>も<sup>ハシマ</sup>下<sup>ハシマ</sup>よ<sup>ハシマ</sup>。と<sup>ハシマ</sup>う<sup>ハシマ</sup>り<sup>ハシマ</sup>。と<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>中<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>  
う<sup>ハシマ</sup>あ<sup>ハシマ</sup>よ<sup>ハシマ</sup>。は<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>事<sup>ハシマ</sup>。今<sup>ハシマ</sup>れ<sup>ハシマ</sup>と<sup>ハシマ</sup>詳<sup>ハシマ</sup>う<sup>ハシマ</sup>  
い<sup>ハシマ</sup>。さ<sup>ハシマ</sup>あ<sup>ハシマ</sup>り<sup>ハシマ</sup>。と<sup>ハシマ</sup>う<sup>ハシマ</sup>よ<sup>ハシマ</sup>り<sup>ハシマ</sup>。と<sup>ハシマ</sup>う<sup>ハシマ</sup>り<sup>ハシマ</sup>。神<sup>ハシマ</sup>  
わ<sup>ハシマ</sup>れ<sup>ハシマ</sup>。大<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>人の<sup>ハシマ</sup>う<sup>ハシマ</sup>し<sup>ハシマ</sup>。と<sup>ハシマ</sup>う<sup>ハシマ</sup>じ<sup>ハシマ</sup>。神<sup>ハシマ</sup>  
ま<sup>ハシマ</sup>も<sup>ハシマ</sup>う<sup>ハシマ</sup>へ<sup>ハシマ</sup>。は<sup>ハシマ</sup>な<sup>ハシマ</sup>人<sup>ハシマ</sup>も<sup>ハシマ</sup>神<sup>ハシマ</sup>の<sup>ハシマ</sup>日<sup>ハシマ</sup>。ま<sup>ハシマ</sup>人の<sup>ハシマ</sup>ふ<sup>ハシマ</sup>

へらへらやうる日ハソレア。女ハシタナサキモナリ。  
トトモモナリ。つぐまん人形ハソレア。物つよひ立  
立をくま追風。そしよもうちうしもわぬもとや。そち  
シルの本。歴史典章かくいもすしよ。けう川を。泥  
派先例石とく多うと。東川おもと。觸鐵部類ナシ。さ  
づき書もやすく。隨筆もあまうとくうる。  
隨筆ハ、みまく。本。じゆもあす。もくもくもくとも  
じらじらよどりてまつすりの。わい。さくも  
じーとくう本も忘れて。じゆく。じゆく。ほまく考も  
幸。すう。大章もくじようをかく。まほほく。

トトモつまき本。本をあわて。はすあーさがす。  
はすつまうじまき。あまうとく。かう。のや。春の  
うきつもええて。や。や。うきつもえ。本局  
先生の玉川の。末後よわくはまこと。いわて。今のはい  
うきつ。うきつ。は。は。うきつ。うきつ。うきつ。  
うきつ。末後と。うきつ。うきつ。うきつ。  
あまうとく。人。と。うきつ。うきつ。うきつ。  
うきつ。玉川の。は。條ハ。末後と。うきつ。あま  
あまうとく。うきつ。うきつ。うきつ。

トレテうれむ事あれど和名抄あるキトシ  
をもんうちタミヨリへき、いれ下。是を隨筆ひふ  
たりて空すくとすして玉ノ川タニヨウらはまよう誤  
の何からいはく。隨筆をするゆゑ下。

隨筆の中より今よりゆくとてめでときは  
枕巻子。李義山の雜纂アラガムをきわどい見る。附  
代の歌をやひよけり奉手ヒサハンドしもありて。入偈會スル  
人もいてうるさい。似たりとふ人ありて。そ參籍  
全身のよしよ。黄直イエシキやまとにちがう。まことを仰アモウ  
きはよき事コト。うるさいよ。うるさいの雜纂を

うるさいよ。ほきいてき。に後まそらう。  
いつまよいよ。まこと。

近き世の人の隨筆。もうつゝまの宿尾。そばめ三百疋を  
あらそ。天野氏。おまづりてのな。下すとよぎ。ま  
心の内りわたりて。盜わく。わく。ひりを抜。そよぎ  
くえて。もよおす。おもて。七十幅表のうわりと。繕用行セヨウヨウ  
れ。ともかく。もついよ。百卷ヒジ。すずり。れぬ。いと。お  
のまよきよ。まよ。こ抄コトハシ。て。家。本。五。六。卷。よ。まよ。い  
き。よ。う。き。備。も。考。し。わ。う。ほ。ふ。ア。よ。み。まよ。と。い。そ

又尺々ふ。

隨筆の下もとづれくまほに章あ書をうなよそ  
せす。うりてとくまうきうちも書はきしにけり。枕  
玉よどむれめと書き書をいと美ると傳とゆひ  
うて治はくと。心ときまとつらがてりとくや次  
まち大して書。文章をへばくらわぬを。道にう  
ゆくはくまくまからくまう。う。う。う。  
くたまはとく中まじく物語もうち。枕空  
六人まくよ重の。かのうとくまらよりあひまよ。う。う。  
とあくくにて居よとあひれて。う。希おの私稿がて

部の弟子ハよみに丘より比丘尼ハゆくと。比丘尼より優  
婆塞ハゆくと。優婆塞より優婆夷ハゆくと。この  
三者のうちの多いの弟子と。比丘と塔へ就入はすと。やハ  
あくくして。きこときくつきを放言。ほくやく。ハを  
えし。おふよ。部のことをきくすはくと。かくして。教をすね  
弟子えきて化をすい。叶を。茶の葉。あくまわく。はま  
くまくまきよ。教をすがくと。定と。が。祖と  
と。う。うのうち。かす。全。もの。きく。う。う。う。う。  
う。う。沙子の用を。や。おも。を。し。い。れ。い。ま。と  
う。う。沙子の用を。や。おも。を。し。い。れ。い。ま。と

まよすか。何のやうも兼ねしものやうも  
よ鹽くらを俗をうるやうひらは下りとはと  
よ道の人すうちらきかへせよへらぬやうされ  
もうへよへとくらむつがとて人のふもと  
の木もじゆをうへり。

布のとがとがは帳の帷とうくるか折のきはよ横  
たまふりとみたりのびとへととキハレしてとよとよ  
よして川をり。今水川いふよりはすへり。まへ頬  
額とすふと。僻廬の店料へ純うけ布とへり。放  
免の店をあ放免とりふと世のころより。うき方の飛

うして流徒は跋後ちくかへきと放免とて捨罪遠使のばり  
さのすり。はくまくらのそくうへる犯わざ者ともお  
のばり。かふりのと。追捕は便わざと急。がんや  
りふ。本草拾茶の日下と。がくすく晴よどが本手す。ま  
やふ木手の毛と。隨身手とのまゆりのよせばくへ  
寶物茶の日下しゆのうへる放免。がんどうすりと。  
大承の木の経済は。馬をくらう。シルハ何の子  
細もすすき事すと。アリト。まじるの人のとさき  
あつひて。大承もすすりと。あらう。うへば。あ  
やりあくきこへく。こくらへて。をこくまを人と。

何とぞいへがよて。じとせはいひとこすいをへむ。  
ア死し。あもやとくもとく。わくヤーク。ば傷  
の敷よ敷てんといひふも。やりうきいじふすまう。ふ  
るを。おききと。考みて。祕訣大車といしま  
づら。ばくもすす。かくも。し。人をもすす。とばの  
代よ。じと。かくも。うりよ。似よ。人のむ。うり  
え。そはく。月ハ。ぬすきとの。みくふ。よのうへ。お  
あ。ふと。うて。同條。もまと。まの勢。うすき。そは  
あ。くも。あよとの。まく。より。のくと。へかく。  
人情よ。うりて。いと。源氏物語。もじる。

ふらふ里。うらの中君。うと。うよ。うも。うえ。うふ。  
もううへ。ふか。序。雪女院の。ほ。よ。その。す。そ  
そはく。う。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。ゆ。  
ふと。致仕の大君の。ほ。と。久。務。の大君の。え。と。じ  
本の。も。ま。り。仙。つ。り。き。故。お。位。す。く。身。の。す。つ。り。お  
う。も。も。う。ゆ。き。女。三。言。よ。お。う。傳。の。う。れ。う。も。  
み。ま。う。ひ。う。き。う。か。う。か。ゆ。じ。き。く。キ。の。あ。何。の  
す。れ。う。か。ふ。も。も。か。大。將。役。公。總。角。の。君。の。ほ。け。り。尔。  
ま。み。す。う。と。ね。う。ん。す。く。よ。宇。治。の。中。君。た。大。君  
殿。の。六。君。世。す。う。う。き。女。す。う。り。ま。と。も。す。く。兵。部

て富一も。うきよへりとひるいとへる。わやまくすり  
ほんのかわらすり。腕月夜の君よ。公儀殿の細所と  
けめてものす。お頭中将のすばらひの志本と  
うしはく。ゆく。中くそれをくすり。今すと  
とううすと。や本一さん。今よりそと。まぼる  
はあじひと。うきよめのすよもくわく。えで  
て情ある事。すりてすりへ。夫一妻ふけまつり。  
はの母のむすと。せがりふよと。ふ事多。とと  
に迷のむすと。わふ順すり。あひときかねしきハ  
迷すり。順がゑの本情。迷ハゑの風致すり。本居先生。は

本情と準へて。徒然艶と萬葉と。うきよへ  
とくわくへ。うきよへ。あふをじねくゑといふ。  
辻君立居。あふトハアヤモタル。ふくわくへ。かか  
かくへ。

人のうきよへ。うきよへ。うきよへ。あふ  
やりじくと。のと。無部で宮の。木柱の君の。うきよへ  
すわませてすいきくすり。と。うきよへ。すりと。せがりふ  
も。がみすじき。うきよへ。うきハ人のぬじ。さく味たれと  
え。幸艶幸若。うきよへ。けい。唐うきよへ  
りふもと。うきよへ。とも。うきよへ。あまくすりへ

もあらむ。やへへすらうなむすはれをじへのうちきんこ  
らよへーもえうるよ。法師へへもたうへうるの三事。  
唐へへにれじへういをり。

法師へへもすまよほきて。せへくまへへも樹掌  
録よ許義方之妻劉氏。以端潔自許。義方掌出。經年  
始歸。語其妻曰。獨處無聊。得無與隣里親戚相往還  
乎。劉曰。自君之出。惟困門自守。且未嘗履閨。義方咨  
嘆不已。又向何以自娛。答。唯作小詩以適情耳。義方  
欣然命取詩觀之。用卷第一篇題云。月夜招隣僧同  
詣。とあり。き事のついてのをへきよ。さへよおはぐん。

おへへの眷が主人の元をじへ先生よやて。百首五杯  
いや車とへへり文題とはへへりてがとどし。一首し  
かよふへへりのじわちへへり。ひうのけへへ。中  
の二點まで。一付もまうりよどみ終た。全くへねれ。山明を。王  
勝魚のあへうちもと。山びくはのこかよほみと。山びの  
手ねよつらうり。け教へ題者す。大きめよ。百首の  
空いふよ。けはへへて。穴の蓋よりうへへ。顎とこれと  
はうすと。うすと。へへ一杯の料へへたれ。うへへ。  
け教へへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへへ

アリてやうやうりへ、ソシテル。河原モト、流連一  
匂。未山義晴トモ。トモトモの幸ちり。  
らうそみて、アレトトヨウ。モニタリコ。はうの威ハ  
ア二日三日けり。あまよりあく。あき花ハすれ。  
又まじまひにとて、ちかゝも。ナーナン故ヒ  
ク。唐キアリシ。ふわ。繁の。あらす。よ。元の。と  
アモニタレ。夏の。す。ド。ア。娘ナシ。かまと。ア。同  
は。あよ。嘆。かよ。あきは。ア。か。レ。ア。リ。ア。

すきは、二種あり。ばはれもとく。紫の油くてあさきうね

よもやにひらくて経きたあけ。それでうれしましと  
りえんもありはまくすやつ本さん。まぐら一匹よ  
て。ばれのいづくひく。けりどりつぶすもあらず下。うきよ  
かくま。菜の部カよんすうり。春葉とくさすすく。大  
きなハ折ハサウエて。さじて。そしうとせ元ハシモト。もく  
りよも。茎ハラスて。ハサウエ。折ハサウエて。くもわねぬまさん  
え。まうとは。うめのむのと。人ヒトたよま。よ菜の顔ハタケをす  
キ。よすす。と。又。つむじふう。春葉をよめやく。よきこ  
り。まちゅまちゅいあくまち。みつけたよ。ばれといとま  
くつまち。まてうつまち。うきよとつまち。えもしもま

事をへてかくとそひへば、あらうとちるね  
辯とへて、う人もありやう人の中へまひ  
うこする。今はほめぬ事ぢり。

はうれ花侍遠をもんじ。さすがにまつまつ  
とくとけり似りし。せ化と人よかふ  
とせ、せわれはさうの心もいとくさう君うとまき  
キヨハレ。後洞元集よりは元のがいとわつて  
催馬樂よ。まはこのはいさみわらふ。さいとげすては  
のと上のちゆみのとおぐとてうふふうと。さうと略  
きーごとひあまとかくしてふ本もよもぎを

はよく事も常の事へ。やうとがよ弊あざんと  
てのれあれど、今案の義うらひもや、でても次をと  
りよ。そへやうりふきよへきよとげすてりふ名  
をくどうのひへ事う。わをよ、えりうすてやむ  
す。やうとくの役よひもくも。貴首祕抄・平家物語  
くよそくうつき。ねふとくよばくとくふね常をえり  
う。今の世の謎ウタともよばくとくの言便ともあ  
とくやくへ。古のくらへ矣す慶考のくわきよ  
う。

國書の中よ詩經とくも。そのうれ強ともつや！

ものよりはともせられりつゝも。まじてんす。  
有へうす。虚字とふりのと。ス思且たの類。書  
とゆきそは。下りましれぬもあり。ほりはるわく  
そく。そく焉哉乎也のこく。各其義ありて置  
ぬきふ。大もへほくまちわうて。それと義理と極す  
外すよ。詩經のそけよ題をよあつし。すうをと  
うづくや。漢のと。スの新もと。小  
序よ。卷。螽斯不佑忌。もあふとんて。螽斯くふ。虫の名  
といひや。譽斯柳斯庚斯。たぐわみを保々。今ても。斯  
ハ虚字とふ。まちきり。也矣之焉。かくも。げ書は用い

うるは一方にて。下り。これと。漢のと。ア。義理よ。う  
うね故。下り。世の傳者。ア。非。う。詩經と後。と。は。  
は。ても。世本のき。こえね。經。くふ。と。ま。ふ。あ。ま。り。よ。  
強。く。ふ。本。と。ふ。か。し。や。わ。ん。ば。く。わ。ん。

女の眉。ち。ふ。事。ハ。然。り。て。書。ん。と。の。事。ア。下。り。下。り。ハ。え  
際。の。一。と。な。ふ。き。不。この。こ。き。シ。う。す。き。不。ネ。ト。わ。う。て。と  
う。じ。う。れ。と。れ。と。そ。う。が。ー。と。お。り。お。す。よ。書。く。あ。り。  
と。大。う。と。割。く。う。ま。ー。と。う。じ。あ。ー。と。や。り。い。う。ね。と。無  
沙汰。す。キ。又。と。う。め。え。女。の。き。と。と。き。と。と。と。と。と。  
ふ。と。う。く。と。料。す。り。た。よ。サ。ー。と。お。ふ。つ。き。と。か。か。む。も。き

すり俗よされを元服とひそめぬ事なし。やまと  
あらわふまへとへり。

享和元年九月十一日始成一巻。先生足川別業・長松密  
竹頬為幽玄之所。因明移住在中。於今四年。欲勵蹇劣之性。  
而五車之富遠在江戸。恨欠且昏授園之事業。削齒并為  
是故也。

石原克丸未つ因明

隨筆二辛酉下

日野中納言資朝マハ太平記よりえてべのくへんが  
人ナリ。うばても志烈のくへゆきのくよち歴古藏  
の本もいきりうきりうき。その日記をくくらむかへ。  
世纪世トモシヨウシヨウト先生ハノヘテモレヒアリ。  
傘のよと。唐笠とくへる。あらうて。世名曰く古う  
まろりくらつゝよやねえうりと。そぞ。雅亮の後  
末抄よその因よ後筆とくへりて。月。うのていこう  
アモウリもす。

れおもひは再度に位よつて努力すへ。裕徳存明。  
皆太帝より下り。次はてげの度へ崩御す。  
さかよわくねば。溢もへきやうもよきと。皇極孝謙  
やうそきく。也。考蘇松傳。天平宝字二年。考蘇松傳。天平  
ニ。上り。現盡の事。考蘇松傳。天平宝字二年。考蘇松傳。天平  
世の溢。奉。ゆきの冠ある。その時。博士。江戸。上  
博士。古代のうらふ。もよ。博士。江戸。上  
體の一枝。もよ。博士。江戸。上  
溢。もよ。博士。江戸。上  
博士。江戸。上  
行迹のあらへを傷して。ちよやかす。す。す。

くくくく。おまかせ。わん。父の。み。君の。み。わん。  
溢。もよ。や。もよ。父の。み。よ。く。也。孔子。ハ。の。す  
は。も。の。も。や。ひ。逃。す。も。き。て。名。は。く。と。く。と。く。と。く。と。く。  
孫の。く。け。だ。く。る。と。く。し。溢。と。え。て。國。と。う。い。  
考。と。う。い。て。祿。と。う。す。し。よ。け。居。の。ミ。よ。き。り。あ。む。  
わ。き。溢。く。る。め。ん。行。の。勧。誠。く。く。と。人。畢。竟。用  
の。詔。す。か。皇。國。よ。此。制。と。き。ル。く。桓。武。天。皇。の。水  
口。す。す。天。平。宝。字。二。年。天。平。の。ミ。う。と。勝。室。咸。神。聖。武。皇。帝。く。う。考  
せ。と。う。よ。あ。う。考。又。公。義。令。よ。天。皇。溢。と。う。ハ。法。と  
設。て。か。れ。す。大。宝。卷。を。よ。此。本。か。う。と。く。改。す。か。と。それ。古。代。を。桓。武  
と。う。す。か。う。と。く。制。と。う。す。變。す。て。に。明。大。德。光。孝。は

三は代の外とす。その始も、遷位のみにて、必ず故事を守り候。崇徳安徳順徳など、ことつてきに、必ず遷号して奉是也。歴迹よりて、溢（ヨリ）して、人情よし、神のむこうよ。竹くぬ故（シテ）、わく、秦始皇帝制云、朕聞古有号無溢。中古死而以行為謚。如此則子議父、臣議君也。甚無謂。朕不取矣。りよ半（ハーハン）わる。深千載一人の卓見の志すりう。郭公（コウコン）とちづか引（ヒカ）をもとめ、手（ハ）がつゝも。されば、くのすゝよ。やまとせて、さて、さきも。しよとも。わすけいつの、よもやがくして、すて、あんめつぶ。よもよも。一すう色。それも、系（スル）と、いはなきく、ほの事。

江戸にて、けぞ一日、それそ物をよこせよ。ちう  
しきふじとす。月日へて、里あるまよふ。耳のりよ  
は、一つきさんすよ。うはー。空谷らややそと  
ハ、吉月キム。ねあくえす。やとす。年月よまれあ  
りき。年、わざれ社の木はす。ううーと。そと。さう  
うと。ううーと。そと。ううーと。ううーと。うう  
櫻の木す。も。ニツツと。も。うゆ。いはまよと。ううと。う  
はく。次、ううーと。りへと。けの色、ハ、と。ううと。う  
はす。やく。ハ、うはな。ふく。いとん方を。一。おと。

うふかよきもうつまひとキアサガマすりあむかて  
ちく部もとづきをすはるしよるがよう。といひまく  
も本のや月のすらめ今そぞくをきりやと。がわせ  
う下もとあとも。じよろきや。日く下へとさのよ。下川  
とやくいわく。人ほどのあのかみにれも。あくまくす  
ろあらん也。

うう圓してハ葉へまだとうつうと。がくもも美蘭美  
菫やくをきこゆ。皇國よ。おもへせらふ。おもふと  
へつようけうてあうきとほきひす。けくう。まこと  
よとほくくふかくのきよりも白薔薇葉のくわく

大キス。又小くわわと。ちくつうへかくもせはう  
せくふげ園の中を。そやれねおよ匂ひくもくと  
をうしな。そきくわくと美蘭のこと。うつう。はう  
キノやけり。やきこそー連歌師の。よ。また葉ふ  
きくわ外の。もくもくわばくま。

ひみちべうて。いふ。返り。うつよ木の葉  
よそくふ。いふ。もくもく。うつよ木の葉  
うう。夏花祭の。よ。やわん。げーさま。

とくとく。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。

うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。うう。

こらよし。こなまへて、うかよつきて、おのひうき  
をうわはふくすあり。こなまへて、うかよつきて、  
うりて、お今がす一本。おふくよ。田中造麻ふとよ人。  
うでくわじかはじの略してね。わざくわざうか。  
とくの略してね。うかよつきて、うかよつきて、  
本居先生もこれとく定て。假字ももう二様ある。  
事すれど、うわはふくす。うかよつきて、うかよつきて。  
お紫象よ。おじのふとけあきて、じのふとけあ  
き。じとけあきて、ふうともりよとせむるやう。  
おじの面向ての筋をとて、おうて、うるやすりて

おうげく。面のうめよひくとくへあじへ向  
へそ。うりふとくとく。向ふあひふとく。  
ううもおまかわく次とくへうとく。省  
まことのとくらす。へん解釈うふのう。  
あぐりくやがれ。それへうとくとき。穿鑿なり。  
うとくのうじくらふとく。おうじくらふとく。  
穿鑿とじゆされば、うとくらふと費す。  
蜻蛉日記よ。みよくとく。うとくを経よ。で  
りとわうて、もむきとく。陸奥のうちれ。うとく  
うとくよつてのうとく。うとくとく。おとく。

き方なりと長よしへうきんとぞ／＼を沈みすへば  
人の文倫寧明臣の陸奥守よすら／＼と天慶八年をもり、仁  
もく上り／＼ひのむすれく天德のけめの事と定ひて。  
和名抄は／＼瓶あは／＼とお茶は／＼急。和名抄の假字と  
じやくとてハ、いそ／＼ともむすけり。村用春海よほま  
よほま／＼とて／＼は、つーの風か／＼川かて、二様／＼流ハ  
えり／＼れどり／＼づき。

わくつと、因よすく飲料の水のよ／＼今尾張國安芸主と  
ハ村ふとく水と伏す。主と升給といひ。主よつまくの取費とけ  
持く未と升料未とりふされと石とくまきうつすとせすくりふ。け  
ハ山田ハ山の尾はさ／＼のちと築くとて、と/orの山のアラ

木ぬ水をとてたて地也。も禁無れよづくくのすとよの用ゐ  
には、下り水とよもくとて、主下す因よ／＼と事。主よ  
詰くとくが、これと地もりひ。はしもくとく。名所の地名みる  
とて、地名く。あすすく坐て、地名とよのそれと、因よ  
伏す井の水すりき。井とし。井とくとく。山あるよも  
用ゆるりよ／＼はて、又平ちう地して、尖井河をとて、  
の所とせきこくを。おせきくらふて、川の底よ机としら玉ふとあつて、  
せきくらふて、用よすく飲水と細き渠としりて、その流のあつり  
すくすり。その地と升すとしよ。主よハ啜のますり。ヒリふ。今  
尾張夷はすと。井利とよす。主よハ啜のますり。ヒリふ。今

むべき國はとほりてつき  
土木のすゝやあん。山城の井もばく院のあり。か  
不の名もむかへて。玉川アてうれ流をまつ。先手井  
もどるも。故くの某井も。むれ渠カバと北の事も  
を。とさ世の先達が井を堀井カバのものとす。えも  
いやはて。尾ふらが毛ほくの因ニ。よも寒。年ぬ。渠  
又伏見カマの尾後カマ。渠又朝霧カマのとすひく。渠  
ぬよ岸カマ。十九カマ。十カマ。十九カマ。井戸の脇カマ。そこの水  
はくもひて。因つカマ。象カマ。すとづく。ばくも山  
黒と山カマ。蒲カマ。そく。あくとづく。あくとづく。  
もき。こはなむく。また居の家カマ。し。起居の

居たり。居所の居カマ。すすめとしひきカマ。そく。りとす。か  
て。うえ。くわくち。きあくす。居の家カマ。すすめとしひきカマ。そく。か  
わと。もじへきカマ。す。りとる。ソふあとーらそ。かく  
流す。りと堀井戸の本カマ。すとづく。すとづく。因のよび  
すとづく。元と堀井戸の本カマ。すとづく。すとづく。因のよび  
こくても。似つ。うくと。きと。え。結。おと。すれ。下と。時  
山のねまく。も。堀井戸の水。すとづく。かく。かく。  
家カマ。すとづく。じと。す。走井のこ。や。走井の水。走井の  
を。よ。わけ。かひん。す。わ。や。走渠の本カマ。す。走渠の本カマ。

とてえてよみがえり。櫻集ももいろち。猿山義家よしのり  
の山あそ水をひきとく。すなごの因ねよはすへども。  
新繪とよよほくくねのまほくれのゆめのゆめ庵えも  
のとくとくすすり。新千載集。れやかのうじれくる  
のものよおせりひよりてりくわくらじきとく。む  
多うり。

居町はもつとも事と九重のうちの事す。はふと  
ふすとす東殿舍門廊は多くれど。名すくてくまきよ  
もへきすとすきゆゑよ遠春門。宜殊門をとくまきよ  
里弟をもへて西對東對。越つ中門をとくまきよす。

こくはくするを設一奉きこくす。東三條殿。小一條殿  
とくふもその在所をりてしむと。とくふもとじと  
て外の人のよすと。風流よつくり。ふより。余桃杷殿。紅  
梅殿をと。とくふもめきよくふもあんと。はく木のめくう  
あり。と。のつりと。ひそめくふと。地名もとと曰い  
きとく。あくと。のきと。て設うるふと。わくや  
くわくと。連引師などよしと。梵灯庵。燈玉庵をと。桃李園  
もきこく。西太カクもとれと。ひく。まきと。梵灯庵。燈玉庵をと。唐のびれ  
くとえて。宋のびれくと。多く。今にすへと。もく。

皇國の傳ぢて化ハ・よき風とす。家をかゝるも、  
家の名は人へよみすわらず。心も、さよ  
心も、うりの、が、この家の名は、うらやましく。小き家を  
一つもじし人何某の宅とす。あゆきとあやさ  
えせ風流す。はい。うらやましの連歌師、  
ちくちく。やさしく。世も、まねきす。それで、登り。そして  
何事も、ほんとうに、おもつふ事の、おとへりやうるま  
わざ。うつしよつする事と。じやうへき事。ぐれ  
うすよせ。古事記して、うまとい。うそが、人。  
云々。

この家の名のうめきとす。うとて、ほり  
きやねのや竹のやまと。川とて、とほくの、うのねに  
はく風と。うやまと。うへて、やまと。徳之本  
うちの心きとす。うほく。うほく。うほく。うほく。  
真間たまもとくとひく。うほく。うほく。うほく。  
うほく。うほく。うほく。うほく。うほく。

うほく。うほく。義。

平維章ときこゆふを。兼侍金吾と。うへん人。東海道と  
り。隨業あら。せはわのうりと。うへん。中よ。但孫翁  
の孔子畫像贊云。是謂克肖。吾豈敢。是謂不克肖。吾豈  
敢。亦唯唐帝之賜充冕。十二章。儼然王者服。萬世之

下萬里之外伏惟聖德遠矣哉發知之夏日本夷人  
物茂卿稽首拜手謹題は夫人の二字者官にて如何  
とすがを率ときしるをりからり維章うれしううを  
しまへりすとやもひへん大見識とせり  
アシキナカニムルモハシテアシキアシキアシキ  
頑ナリシカガリのそ、ルノ國とくら公とル  
ヤクシカナ代そ、シテき飛ナリ。聖人の書を  
ツカツヨウモ、聖人の情をえあねゆゑ、聖人の事  
リふそし。孔子の外番を夷狄といひ、國を中国  
とて見るなり。ハシナラ情をとて、そのはまうどり

學じしよ。うるむ妄言とぞや。ううの人を孔子の父  
のう父と賊とのうう。かのきも城とぞも。ミタモ。  
因一東海漢よ北名の平一雅す。中華ハシナラや及  
多次ハ朝鮮と安南と。世ニ國ハシナラ。華とまみゆ  
ヒ。宣唯のとをし。各字称号の平一き。三國よ及  
やあふけ二國とのとく外もす。て夷言ことくが。頑  
徳ナリ。皇國ても。は戸とほして。に戸とひ。大坂と下  
うう。ナラハシナラ。西土の称呼を準とて。それは似る  
と云ふ。ナラハツカナ。西土一域。皇國一域。ミ

ノリ一域ノリレモ一國ノハ稱号「ヒトヒテニテル」  
似どシヒトホシホ本アビ。朝鮮安南のノシニシ似ドリ。  
久トノハ國ニ屬て何事ノミ制ドリ。故ニはミハラの  
ニ國の似ドリニ恥リテ似ナシノミシテソクシテシカキニ  
シムアレ。

同一書ヨリ後上人トニテ。上人ノシニシ不ミシニミ。を。  
シモトナリ俗語ナリ。俗文ヨリナリ。世一言トキウ  
ノルシカハリ。公家尼トシシ。俗ナリトナリ。トモ。  
ミハ天子ヨリナリ。人トシシ。トモ。アリナリトモ。思  
ラシシツコキ。うふの書アシム。秦漢トシコキ

の百官と主人と。うなまやあふ。王トリハトモ同ノハ  
の天子ヨリナリ。アリナリ。トモ。トモ。トモ。トモ。アリ  
シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。  
シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。  
シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。  
シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。

うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。  
うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。うふ。  
消シシム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。  
シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。

字もシム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。シム。

うふほとよきあもて・俗語本とよせ・うとうてひきえ  
しはともれそつけてもじと・まねきとくばー・かせを  
さるは・じうひよか何と・うつとく字をよひす  
うれい・や・まわらうて・や・とかとよみれ  
す・うれい・や・まわらうて・や・便ホー・をこうそき  
す・うれい・や・まわらうて・や・便ホー・をこうそき  
す・うれい・や・まわらうて・や・便ホー・をこうそき  
草木の巻ひぐへの女の用よ・月比<sup>不平</sup>  
一ノ絃<sup>極</sup><sup>熱</sup><sup>難</sup><sup>収</sup>・花のち<sup>一</sup>とゆ<sup>一</sup>・い・くまきよ  
えをい・そしうくぬ・こ女の巻ひぐへの用よ・月比<sup>垣</sup>  
りわ<sup>主</sup><sup>非常</sup>・ほな<sup>一</sup>・じま<sup>一</sup>・よは・たうぬ<sup>一</sup>をうの志

うりある何づらをすよみてや・かねやすくまつまくへ  
ぬ・あけとまこまうすとくへとくも・ばれらし余々森  
うの女とをすくねば・まこくうとくとくに・とく  
ほら・ちてすのあくちの葉生<sup>一</sup>・花<sup>一</sup>・の家  
音<sup>一</sup>・とく・い・くら・し・ま<sup>一</sup>・とく・す・今日太風<sup>一</sup>  
眼入<sup>一</sup>・よ・く・き・く・ふ・人・も・く・一・れ・く・う・言  
のまうとく・右學<sup>一</sup>・とく・を・事<sup>一</sup>・も・繁集<sup>一</sup>・のけ  
す・う・も・く・消<sup>一</sup>・と・え・よ・何<sup>一</sup>・と・お・言・め・く・き・く・の  
お・き・く・の・く・ま・く・け・ト・わ・も・ま・く・お・く・く・一・は・  
片冲<sup>一</sup>・岡本<sup>一</sup>・后先生<sup>一</sup>・の・考<sup>一</sup>・と・人・か・す・か・れ・す・か・れ・す

と。その考にしやうりも多んじあらきだのなか。  
すべてせのまゝ向むかひもうちねりあると。今けの卦  
を。お言よりいへども。今卦さとほく。小と俗説も入  
る。頼改の。の卦。すうじ。怪うの。うら。猿  
尾。くも。木と。さく。きと。木と。木と。葉と。葉と。  
うそ。うそ。の。すう。うそ。と。うそ。うそ。

佛は。縫夏。うつ。本の。あら。天竺。は。着。圓。本。く。夏  
の。れ。も。い。と。う。く。ほ。く。て。何事。も。懈。事。も。そ  
き。と。とは。一。つ。して。か。ま。は。ま。せ。そ。が。つ。そ。の。行。業  
も。ま。し。急。の。ま。す。今。の。世。も。寒。愁。苦。と。何。伎。魔。

そもそも。冬の。い。空。き。よ。朔。く。く。せ。き。と。あ。と。ふ。も。故。か。し  
わ。し。き。こ。皇。圓。ハ。空。底。界。は。や。一。極。く。く。中。よ。従。電  
き。か。の。あ。い。取。き。る。空。電。動。ち。ま。か。れ。と。往。節。と。往。也。緒  
冬。ト。ま。す。し。ま。う。と。え。き。

佛書。よ。う。多。偏。袒。右。肩。ハ。う。の。圓。ハ。い。と。卑。き。故。常。ハ。左  
右。と。と。に。袒。う。と。ま。き。人。よ。じ。人。も。う。か。と。着。う。も。わ  
ら。し。す。サ。ハ。ハ。ト。は。ふ。う。く。く。手。レ。と。ま。く。と。ま。く。と  
け。ま。肩。ぬ。ん。す。あ。が。包。き。ま。す。と。ま。す。ま。と。ま。機。軋。モ  
リ。ふ。と。の。ま。い。と。あ。が。包。き。ま。す。と。ま。す。ま。と。ま。機。軋。モ  
未。の。教。と。教。て。ま。う。め。て。し。ー。と。せ。よ。タ。ン。ユ。モ。と。い。ふ。す。が。

團子といふ字うとうとよもえてお下りはまちやまの  
と音訓よもんじもじるよもんじる名ともいへ。人種  
の唐菓子といふ中め團をすりつぶふやもんじ。  
今團喜の取とみるよ末の粉よ胡麻とすへ給へて丸  
くくまふりのえ白き墨きお芋すりこみる。基よねんぐ  
團碁といふものちと漢音よもんすくて好字よち改めて團  
喜といふやうもんじ。尺素往来よ碁子麿といふものえり。  
されハ伊勢尾張とこそハ今も潤すかもそ。湯屋よ胡麻  
とそんじら。これらとりてゆきひまくす手うりにて今の  
タシユヌハ麻ひれはすれどそハ首くらむと代とすま

ホトトモがすりせ考ふと迂遠しや。

うの四聲といふ。上声をいへほめひくすくを  
く未アリヤとよあらはすくもすをすり。平声ハドクスミ  
同りりと去声ハドケウツドクシキリ。アリヨウ声  
之聲のはくは方。遠はしきりをもかよりのあくは急。  
いふ。入聲もはく声。それなく事直よ急して。未だも  
けりのあく。やまう声ハ喉のうらへ更よ入り花す。放入  
せひふ。去聲と入聲とくわくくはくをも中よ。去ハナ  
シヨヒム故。アイウとルシトモウ韵あり。入ハ直リ片  
ノ放息吹すがくよもりて。殊勲を隠して。考の矣

へうが聞こあり。皇國の間と平上去の三あり。それ  
うち去<sup>サカ</sup>ぬまづきしト。さくの声をば。平  
聲とりふ本<sup>シマツ</sup>ト。ふはる本<sup>シマツ</sup>ト。ゆゑ  
よりはま。すかを入<sup>スル</sup>。俗語よ  
人<sup>ヒト</sup>サ<sup>ハ</sup>火<sup>アラグワ</sup>ト。ゆふりふさうむ。  
さよ<sup>ハ</sup>入<sup>スル</sup>。火<sup>アラグワ</sup>ト。ゆふりふさうむ。  
すりていひ歌<sup>シ</sup>。そハ陳韻<sup>ミケイ</sup>す。放<sup>ス</sup>。う<sup>ミ</sup>す。陳  
韻唱嘆の間<sup>アリ</sup>。息のほ<sup>モ</sup>事<sup>ト</sup>。ときめく。心<sup>ト</sup>を  
ねといふれど。おはの城<sup>シ</sup>のくらひ。あ<sup>ハ</sup>潤<sup>ム</sup>。又  
くからゆ<sup>ト</sup>。あ<sup>ハ</sup>くはとも。

書佛書<sup>シフシ</sup>。右本<sup>シマツ</sup>に。四声<sup>ヨウソウ</sup>と  
ひるけ上<sup>カ</sup>り去<sup>カ</sup>り。それとさうとやよ書<sup>シ</sup>。川音<sup>カ</sup>  
曲雅<sup>キラハ</sup>はちもよ<sup>シ</sup>。よもよの上<sup>カ</sup>りゆり<sup>シ</sup>。ゆくの  
へて。うかげく<sup>シ</sup>。そく<sup>シ</sup>。近<sup>シ</sup>。歟<sup>シ</sup>。歎<sup>シ</sup>。歎<sup>シ</sup>  
き。あく<sup>シ</sup>。き。う<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。  
すく<sup>シ</sup>。ゆく<sup>シ</sup>。すとや<sup>シ</sup>。見識<sup>シ</sup>。ふ<sup>シ</sup>。の<sup>シ</sup>。ゆく<sup>シ</sup>。  
みく<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。  
よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。よ<sup>シ</sup>。  
それがわざと書<sup>シ</sup>。清濁<sup>キラハ</sup>四聲<sup>シマツ</sup>訓詁<sup>シフシ</sup>の則<sup>シ</sup>。あ<sup>ハ</sup>く<sup>シ</sup>。あ<sup>ハ</sup>く<sup>シ</sup>。  
それが<sup>テ</sup>寛<sup>カク</sup>すまと<sup>シ</sup>。えすなりり<sup>ハ</sup>。あ<sup>ハ</sup>く<sup>シ</sup>。あ<sup>ハ</sup>く<sup>シ</sup>。

さりとて、たゞも、言の經疏の如ハ、下本よりやも、あとも  
いづれも、あくまでも、どしも、うえは、下本と告朔の  
臘羊といふ。皇國の書也。國史令津本と云ふ。  
下本も、あくまでも、物説と云ふ。上りも、  
あくまでも、てよるゝもの。顯昭の如今集注は、ほむ  
は獨の事と仰う。今之の學者ハ、すみやかに、  
おもひます。

字音は、つづるセルセニ。すみやかに、清わくハ獨  
を平上去よ。トナリ。トナリの平上去よ。もて、トナリは上り  
去リ。トナリ。其聲ハ、いづれ附つて、トナリは、トナリは、

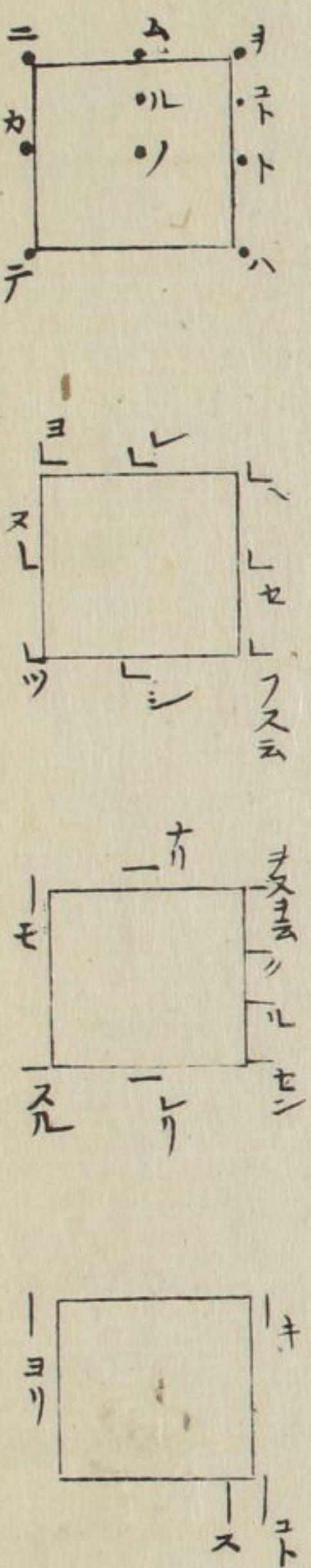
ナラ故、發語の聲用のゆきうるを以て、よきづきりと  
よ及ぶ。然も、語のゆきよすまくへ、上りけり。柔じて、御  
よづく上かる。ナラ故、發語の聲ぢつづきりと、絶  
アレ。との聲ひいて、申らる。便童蒙。弁陰陽。この二  
ウをいはて、發語の聲をもとめ。平上去も、とすも  
ぬす。は、下り中よ。上りへ、上りへ。もとめ。下りへ  
が事字も、下り。もとめ。もとめ。もとめ。下りへ  
もとめ。辛者もとめ。もとめ。もとめ。もとめ。下りへ  
声もとめ。發語の勢うよ。也。トナリ。後のみよす  
ゆくを。言便よ。トナリ。トナリ。がり。柔軟もとめ。

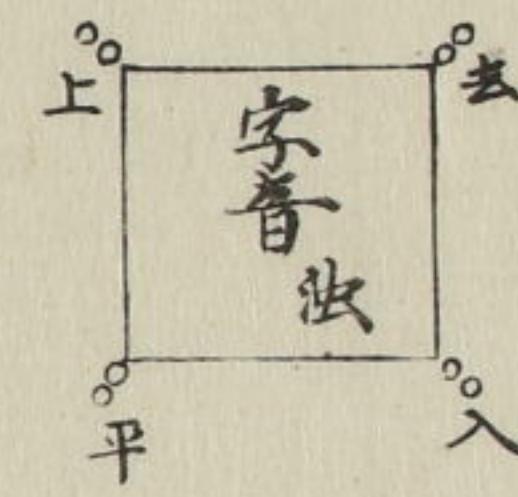
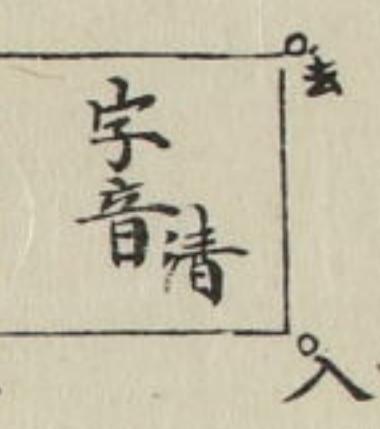
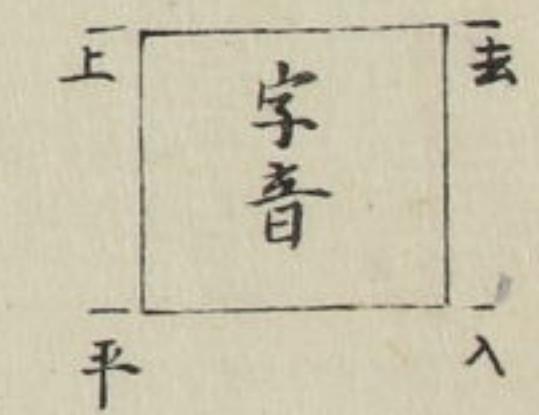
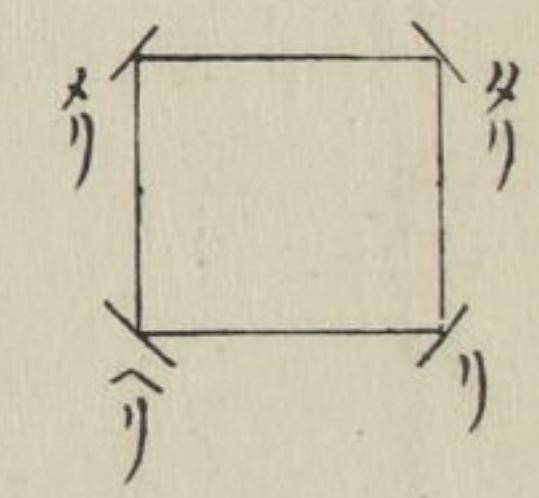
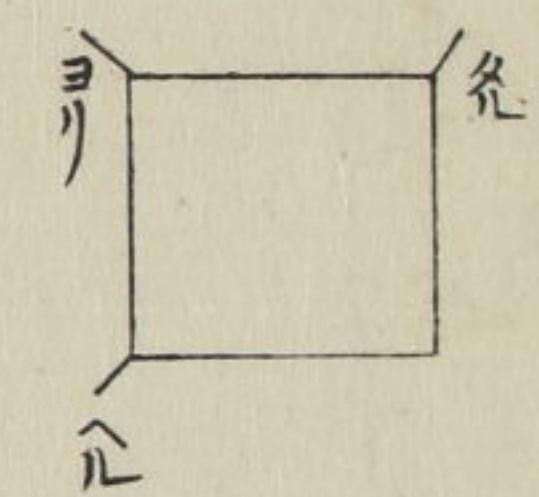
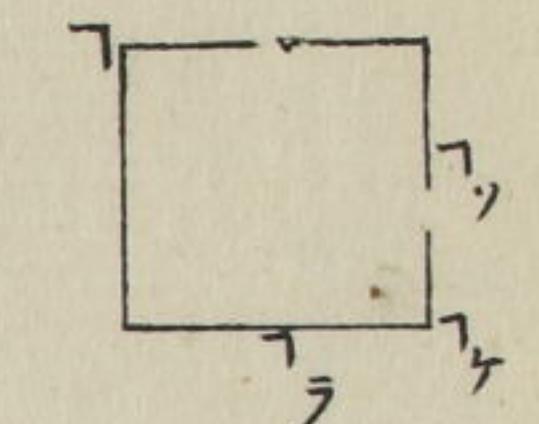
りうりうりよありりは故郷の勢りに及  
じてさればひれも獨りかくま度もしに風化をひ  
き付けてくるあるよと。

本居先生を今一清濁遣へるゝああゝよ流すひ  
ゆふり、遠江國人石塚清麻翁といふ人の死とひゆめ  
を言清濁考とし書とつたり。へと發行室へおひり  
しれ。稻葉大平さんとおひりき旅のすへ何れぞ  
ひせられて。とえみるわらへくのうとひく。  
今未だへきまつぶとすすりぬまつりふけと  
えもけむわらへ。そし一清濁のうまむ黒ハ。

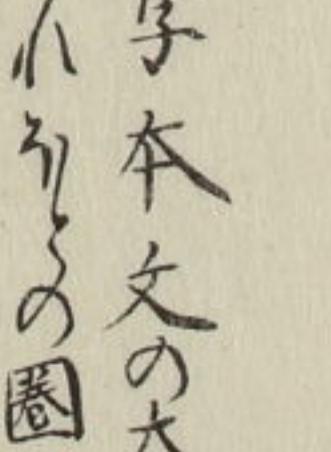
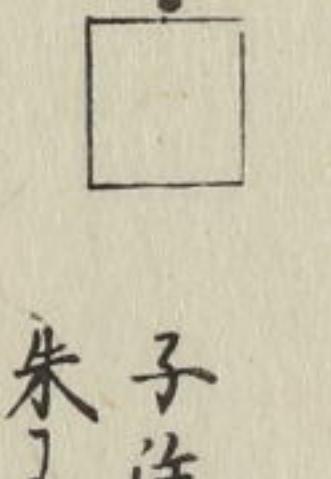
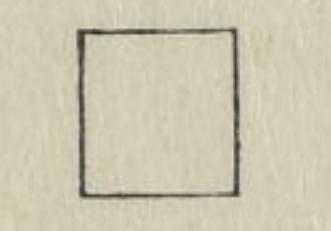
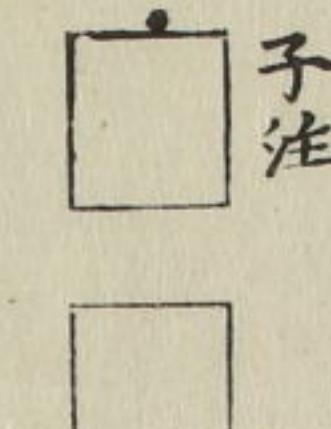
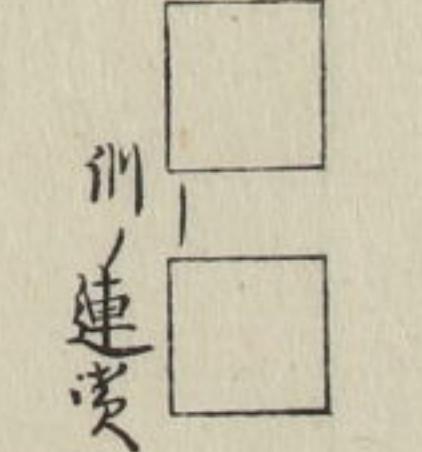
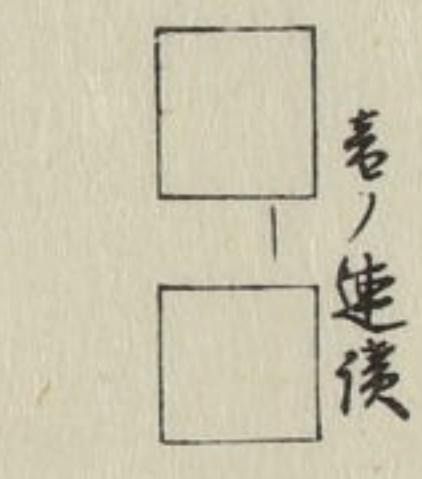
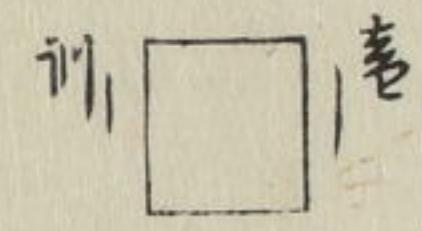
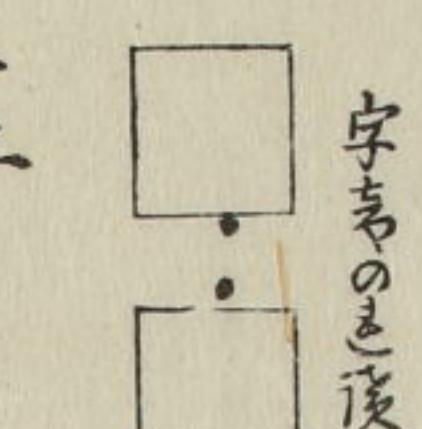
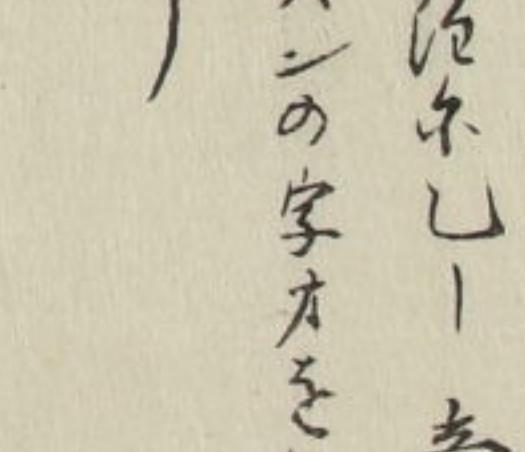
ひはまが上り劫りの是ともしてありひよ。下はま  
すう便よきよ。言便とひぶりの多く上も下も上りの下  
はあざる事上りのよもよもを教。右すまこと後より圖  
ひう多。の清濁考よまゑのよもよもをわんとお  
トけくろをひくわん。

今之校舎はあらう一木本もたつとも黙と勘あ  
もめて點圖とづくり。そのは日本をよの古本と  
みがみ手づけは家の態一例をうし。





又字書の傍添ス一立一と書き下す  
不くありしハシの字方をほき下す  
音の首又キ)



□ □ 入 古人の名

子注ハ又字本文の大さと字の首  
朱と○△△の圈と闡字よつて  
又毎字はもとあらう

のよ。字音も平上長の三声ハ文字の筆ぐもを揃  
下と上との中の平上もナリ。入声ハ入声のナリ。入で  
何書よとナリ。

アモレを歡樂とし。死容を古事とし。凶とは少と  
べる。五六百年とすの記源。もに常主と。去年の緑  
葉のふはりよりよきもじて。地水よりうづきぬ。  
月は人よりき光すりうち。猶山行教。信水良治すよ。  
せうとよと。ナリ。固くナリ。すくも朗詠ナリ。ひそ  
あへす。歌もしもナリ。すくも朗詠ナリ。ひそ  
もやと。まの何とす。遇す。良治はうづり。ナリ。ま

と歎息せり。殊う一ねえの足とかづらしくてかまへず  
もあらずすくすくとれど、敗宵歡樂生歡樂とうきて良  
治しゆやうにいふ。昔日聖賢昧聖賢ときしてすて  
みぢめを更ふくほの木へとぞ。

尾張國より翁もくりよ詠酒歌あり。詠酒もくとも  
ねむる。利口す。とくにきき。ひき。ひき。翁もくによ  
アモ盛りて。とくに。何事の情ともかくばれとぞ。し  
りとと日ごろをもんじて。ひき。ひき。翁もくして。や  
わくき。しよげ。や竹の歌とき。もくの木へと  
一木もく。とくもく。とくもく。とくもく。

うれて。しよ角を。先達は。うれて。泣ち。ばても。岩よどみ  
瀧川の。とつ。小舟は。よそへれ。こと歌ハ。解は。うれて。  
うれ。うれ。うれ。うれ。うれ。うれ。うれ。うれ。うれ。うれ。  
うれ。うれ。うれ。うれ。うれ。うれ。うれ。うれ。うれ。うれ。  
金葉集。ふと。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。れ。  
の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。の。  
それと入わる山の遠方。見歌集。もと。す。体。こ。う。音。  
月の。月の。月の。月の。月の。月の。月の。月の。月の。  
や。ち。後浪の。う。直。し。れ。も。の。音。く。う。山。家。

集じしよひとまよあくねとちりんと月もるる  
立あらん。うれしきれどもそぞとさきこみす。

二村山と尾張國ナリ。兵部式よ尾張國驛馬。馬津新海兩  
村各十处

もある兩村下本兩と西ノ浜古事記有り。今もあ税有り。多くへ三河國ト宣りれり。陸奥の十所の薙薦。  
少ふと比奈トモアレ。さかとえ。さかとえ。行勢の花  
行勢トモアリ。今宮神社ヨリあつて。行勢の花  
ヨモウムハめうとせ。甚よ信。久松神社碑ハ天  
平の右衛門トモアリ。久松と久川。壇の石丈トモアリ。天  
つねの碑ハ右衛門にゆき。ハ志とよ。あひゆかひばと

もし。うすくあく。すすまふあきよ。萬福寺。此家集よ。石  
立やはうれ遠よあわせきへ。えとせ半トモアヒシ  
きねとあひ。と津狂とまくふす。とあひ。袖中抄  
よ顯昭云。いづくとも。陸奥のゆに。けりのい。とある。  
日本のとそとそ。但田村海軍極夷。と財。うのそそ。  
石の面。日本の中のとそと。とおれられ。ふ文。うのそそ。  
やえと。も。あが葉。と。うそそ。南部殿。のとそそ。  
六。ほ。う材。あら。も。よ。石文大明神。と。社。あら。石文。酒藏。  
て。ね。う。神。と。神。よ。石文。大明神。と。社。あら。石文。酒藏。  
う。ま。う。石。あら。も。よ。石文。大明神。と。社。あら。石文。酒藏。

黒あくらよせんとひのとき。かくとも駄木をさすりあつた。

かくの半はんもとすふいもあらきよ。

まことに革命の運がいに何事うらやましくて。名前  
あらうしてれどもあくたせり。あくとく六本巻はうそく。  
平洲松窓。まことよしむれんとす。何より今居先生と  
あくたれ。在事記傳へと寶ある書つくり。やくとあきわ  
くうとくわきうら。光子あくともうきえれ。まことあきわ  
まことれとれ涅槃の如はとくしまよ。さてとき没教とくく。  
阿難迦葉も校くひとと。華西の厄。うれしい。まことあきわ

集林元年十二月十一日於品川在居更成一小舟ノ

四明

佛文うぶく衣 前篇後篇續篇拾遺

半掃菴也有翁滑稽好事の魁として俳諧中の能道家で  
余詩哥文書は富くあらへ群出せる事ハ世の人々と  
おおゑ所詮せひとてよびとあくぬうちより社文ハ群  
きり一家内洒落にて奇く妙く句中小きら形う事と  
物く文意よほくせよ前篇ハ院よ先年うり世よ所を收てよく  
人の初稿よ所と後續拾きよどります絶世の素顔を  
文をふうんとする人げ書ようりその轍よくハ又戯文の佳境を  
ひづべきものなり

尾陽書肆

東壁堂欽向

